

おわりに

原子力国民会議は、原子力の正常化に向けてできることはすべて実行する気概を持って活動を展開しています。“数”は力を生み、“質”は信頼性を生じ、“メッセージ”は連帯感を築きます。この三要素は原子力国民会議の行動原則です。

この冊子「原子力の誤解を考える」は、原子力国民会議からの国民に向けた“メッセージ”の一つです。そして、原子力に対する本当は故なき“誤解”を解く方策として“登山電車方式”を採用しました。この方式は理解あるいは誤解にまつわる情緒とどう向き合うかを本質としています。一言でいえば、私たちは「1 ミリシーベルトの被ばくは子供に健康障害を与えるかもしれない、という思いを許容しようではないか」と主張するのです。山本七平が「空気の研究」で「福沢諭吉の科学的精神を無視した物質的側面を重視した導入」を執拗に批判するのはまさにこの点に関係しています。西洋人は自然の科学的理解に関して“情緒”を持ち込みません。日本人は昔から子供に対し「あの山にはお化けが住むから近寄るな」と言い聞かせて、危険な山奥で子供らが危険な目に合うのを防止してきました。ここには便宜的要因はあっても科学的精神はありません。1 ミリシーベルトは危険な山のお化けに相当すると思えば、「1 ミリシーベルトの許容」は日本人にとってはおかしいことはありません。この認識が原子力国民会議の新しい提案です。

しかし、この認識だけでは完結しません。「1 ミリシーベルトが間違いだと認識する」人と「もしかしたら1 ミリシーベルトで子供が健康障害を起こすかもしれない」と懸念する人の融合をどう図るかという問題があります。歩み寄りが望まれます。それは何か、となるのです。両者の間に望まれる人間関係は「お前とお前の関係」に入ることです。私が相手を“お前”と呼び、相手は次の瞬間私を“お前”と呼ぶ。この関係が歩み寄りなのです。日本人はこれで十分です。その結果、「1 ミリシーベルトの万が一問題を気にする」人は、「1 ミリシーベルトの万が一問題を気にしない」人の行動に理解を示し、気にしない人は気にする人の気持ちを理解することになります。このことにより、1 ミリシーベルトまでの除染の愚かさは万が一問題の人も理解を示し、膨大な税金を業者に不当に丸投げしている状態を改めることに賛同することを期待したいのです。ここが原子力誤解問題の日本的な解決策であると考えますし、二千年の

間、私たちはこのように問題を解決してきたのです。

残された課題もあります。それは、時間不足のため、“原子力誤解”の理解のため、登山方式を提案しましたが、説明の仕方が登山電車方式に十分即していないという点です。しかし、この問題は今後の課題ですが、先送りしないで絶えず吟味・検討していかなくてはなりません。

このような原子力国民会議の道なきところに道を作ろうとしている試みに対し、理解を示していただだけでなく、活動に参画してくれる同志が生まれることを心から切望しています。

終わりに、本冊子を作るに当たり御支援を戴いた原子力国民会議・原子力の誤解分析検討会の皆様、その他協力して下さった多くの方々に謝意を表します。

平成 28 年 7 月

宮 健三・飯島一敬・植田脩三
原子力国民会議

原子力の誤解を考える

©一般社団法人 原子力国民会議 2016

2016 年 7 月 9 日 初版第 1 刷発行

著 者 宮 健三
飯島 一敬
植田 脩三

発行所 一般社団法人 原子力国民会議
〒110-0008 東京都台東区池之端 2-7-17
IMON ビル 10F
TEL : 03-5809-0085
URL : <http://www.kokumin.org>